

就職活動は大学生の重要な関心事の一つですが、当然、いくらお給料がもらえるかということは気になります。ここで、日本全体としても給料が上がりにくくなっているという問題もさることながら、給料の男女格差というものもあります。理系大学は伝統的には男性が多いと思われませんが、女性の入学者も徐々に増えている昨今、この問題は考える価値があるかもしれません。

男女格差はどのくらい？

国税庁による令和3年分の調査(令和4年9月報告)によれば、給与所得者が受け取った年間給与の平均値(いわゆる平均年収)は443万円でした。男女別で見ると、男性は545万円、女性は302万円でした。

理系の技術者は比較的男女の給与格差が少ないと言われますが、ITエンジニアを対象にしたある調査によれば、男性の平均年収が619万円であるのに対して、女性は562万円でした。また経験年数5年未満では男女格差はないが、5~10年で格差が拡大し、10年以上で再び格差がなくなる傾向も見出されました。この結果に対して、5~10年の格差拡大の時期に多くの女性がキャリアを諦めている可能性があるという専門家の分析が示されました。



格差の要因は？

ではなぜこのような格差が生まれるのでしょうか。よく指摘されるのは、女性は非正規雇用が多いこと、管理職になる人が少ないこと、などです。非正規雇用は昇給しないことが多いので、長く働いていると、だんだんと正規雇用との差が開いていくということです。また、責任が重くなる管理職はそれに見合った給料を受け取ることになるので、そこでも差が大きくなるというわけです。

このような分析から、いわゆる男女格差は働き方の違いであって、実質的には男女格差はない、という結論が導き出されることもあります。

重要なのは、その違いが生まれる背景でしょう。そこには、育児や家事は女性の仕事だと考える慣習や、女性は感情的だからリーダーシップが取れないという偏見が関わっているかもしれません。これは裏を返せば、男性が働いてばかりいる背景でもあるわけです。

女性がキャリアアップし続けることや、男性が家庭生活にコミットすることを、もっと選びやすくなるといいですね。

